

3. 第4条 — 競技者の用具  
（“イングランド”協会からの提案）

| 現在の文章  | 新しい文章                                                            |
|--------|------------------------------------------------------------------|
| ストッキング | ストッキング — テープまたは同様な材質のものを外部に着用する場合、着用する部分のストッキングの色と同じものでなければならない。 |

理 由

ソックス（ストッキング）の上にあまりに多くのテープを巻く競技者が増加している。これによって、ソックスの色を複数にしたり、ソックスの色を全く変えてしまったりすることになり、混乱を生じさせる可能性がある。特に副審はボールがアウトオブプレーになる前にどちらの競技者プレーしたのか見極めなければならないことがある。

＜日本協会の解説＞

日本では、既に2011年2月3日付“審1102 - M0026号”：ストッキング上に着用するテープ等の色について」をもって、Jリーグ等の試合において、ストッキング（ソックス）の上にテープやバンテージ、アンクルサポーター等を着用する場合、そのテープ等の色はストッキングと同じものに限ることにしていた。

今回の改正によって、このことが競技規則第4条に規定化されことから、すべてのカテゴリーで適用されることになった。

なお、透明のテープについては、テープ下のストッキングの色が見えることから、着用は可能である。

4. 第8条 — プレーの開始および再開  
（“イングランド”協会からの提案）

| 現在の文章                                                                                                                                                               | 新しい文章                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>違反と罰則</p> <p>次の場合、ボールを再びドロップする。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ボールがグラウンドに触れる前に競技者がボールに触れる。</li><li>・ボールがグラウンドに触れたのち、競技者が触れることなくフィールドの外に出る。</li></ul> | <p>違反と罰則</p> <p>次の場合、ボールを再びドロップする。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ボールがグラウンドに触れる前に競技者がボールに触れる。</li><li>・ボールがグラウンドに触れたのち、競技者が触れることなくフィールドの外に出る。</li></ul> <p>ボールがゴールに入った場合：</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ドロップしたボールがけられて直接相手競技者のゴールに入った場合、ゴールキックが与えられる。</li><li>・ドロップしたボールがけられて直接そのチームのゴールに入った場合、相手チームにコーナーキックが与えられる。</li></ul> |

理 由

両チームから競技者が参加しない形でドロップボールが行われた結果、得点が発生してしまうケースが多くある。このようになった場合であっても、得点を与えなければならないという圧力が主審に浴びせられることになる。また、試合のバランスを取るためにキックオフ後相手の攻撃を止めることなく、得点させるというような見苦しい状況にもなることもある。

＜日本協会の解説＞

重傷の競技者対応のため、ボールがインプレー中に主審がプレーを止め、対応後ドロップボールで試合を再開することがある。その際、フェアプレー精神を考え、攻撃の意図なく一方のチームの競技者のみがドロップボールに参加してボールを相手に返したところ、誤ってそこから直接ボールがゴールに入ってしまうことがある。

そのような場合でも、主審は競技規則上得点を与えざるを得なく、また得点したチームは不本意な得点を取り消そうと相手に得点を与えようとするケースが発生したこともあった。

このような事態に至るのを防ぐため、ドロップボール後にキックしたボールが直接ゴールに入った時のみに限り、得点は認めないとしたものである。パスやドリブルなどでドロップボール後に相手のゴールに向かってプレーが続き、そこからゴールした場合は得点が認められる。